

本と花のラブ・ストーリー グランプリ作品発表

本を開くと、花びら一つ。

茶色く乾燥した花びらを摘むと、呆れるような、愛おしいような思いがこみ上げてくる。

妻が逝ってから、本に挟まれた花びらを見つめるのはもう幾度目だろうか。

研究にかまけ、本に埋もれる私の暮らしに、花の彩を添えていてくれたのは妻だった。

そんな妻は、自分に癌が見つかり逝ってしまう日まで、残される私の暮らしの心配ばかりしていた。梅干を漬け、新しい下着を用意し、そして私が気付かぬうちに本の中に花びらを忍ばせていたのだ。

私の暮らしから花の彩が消えないようにと。鼻を寄せると、乾いた花びらから鮮やかな匂いが漂う気がした。

私はその花びらを、先に見つけた他の花びらの入っている瓶に大切にしまっておく。

この花束を手に妻に会いに行く日のために。

静岡県浜松市 石塚 由加里さん

静岡県浜松市 石塚 由加里さん

●グランプリ作品(1点)

静岡県浜松市 石塚 由加里さん(35歳・女性)
賞品 図書券&フラワーギフト券合計5万円分

●佳作(2点)

兵庫県明石市 伊藤 陽子さん(38歳・女性)
東京都杉並区 久保田 麻莉さん(20歳・女性)
賞品 記念品

■募集要項

●テーマ/本と花が登場する素敵な恋の物語を作ってください。

●募集期間/平成22年2月1日~3月20日
(400字詰原稿用紙1枚程度)

●応募総数/710点

●募集媒体/中日新聞、リビング新聞、公募ガイド、懸賞ナビ、Web登竜門他

●応募者プロフィール/8歳~84歳

全国(北海道~沖縄)海外(モンテリオール・香港)



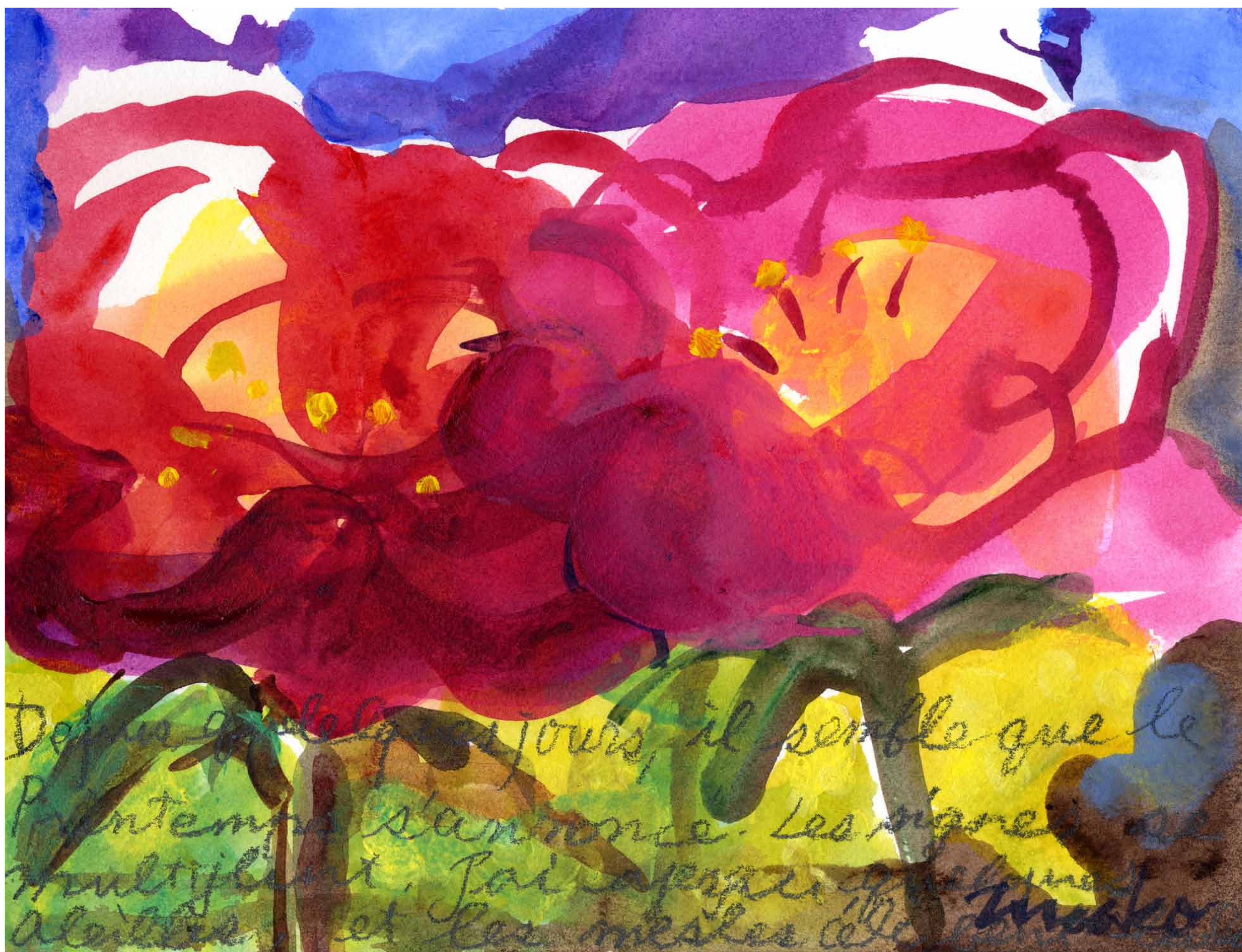
選考委員長

城戸 真亜子

洋画家・名古屋市出身

選考理由)

押し花は、いつも不意にあらわれる。すっかり色褪せていくせに艶やかな匂いはそのまま。ともに人生を歩んできた人に先立たれるということがどういうことなのか、五感に訴えかけてくる作品。感情を抑え、たんとと語られているがゆえに、愛する人への思いと、埋められぬ喪失感が美しく心に響きました。



今年(2010年)は国民読書年

4月23日は世界本の日。

本と花を贈り合う、サン・ジョルディの日

